

應用 CLIL 的 JSP 飯店實務日語教學實踐：以提升實務能力 與日語能力為目標

栗原祐美

致理科技大學應用日語系助理教授

摘要

本研究透過 CLIL(內容語言整合學習觀)設計 JSP(專業日語)飯店實務日語課程，提升學生的專業素養。本課程主要目標包含提升飯店實務能力及日語能力，並融合實地研習與實務練習等多元教學活動，以培訓學生未來在實習場地或職場所需的能力。本研究以 45 位應用日語系大學生為研究對象，進行為期半年的選修課程。課程期間收集學習者的問卷回饋、測驗成績及期末心得，並進行量化分析。研究結果顯示，採用 CLIL 的飯店實務日語課程運作模式，可幫助學習者提升一定程度的實務能力與日語能力，且可獲得學習者的正面回饋。

關鍵詞：飯店日語、JSP、CLIL、實務能力、日語能力

受理日期：2025 年 03 月 10 日

通過日期：2025 年 06 月 06 日

DOI：10.29758/TWRYJYSB.202506_(44).0006

Application of CLIL in JSP Hotel Practical Japanese Teaching: Aiming to Enhance Practical and Japanese Language Skills

Kurihara, Yumi

Assistant Professor, Department of Applied Japanese, Chihlee
University of Technology

Abstract

This study aims to design a one-semester JSP (Japanese for Specific Purpose) course focused on a practical hotel Japanese, employing the CLIL (Content and Language Integrated Learning) approach. The course aims to enhance students' professional competence, including practical skills and the Japanese language in the hotel industry. The course was structured with a focus on improving practical abilities and hotel-related Japanese language skills, integrating various instructional methods such as on-the-job training and practical training to equip learners with the necessary Japanese communication skills for future internships and workplaces. The participants included 45 students, enrolled in a one-semester elective course. Data such as questionnaires, midterm and final exams, and final reflections were collected during the course. A quantitative analysis was conducted to evaluate the program's effectiveness. The results indicated that the course demonstrated a certain degree of improvement in both practical skills and Japanese language proficiency. These findings suggest that a CLIL-integrated hotel Japanese course effectively enhances learners' professional competence and is well accepted by students.

Keywords: Hotel Japanese, JSP, CLIL, Practical Competence, Japanese Language Skills

CLIL を生かした JSP ホテル実務日本語の教育実践 —実務能力と日本語能力の向上を目指して—

栗原祐美

致理科技大学応用日本語学科 助理教授

要旨

本研究では、CLIL（内容言語統合型学習）を取り入れた JSP（専門日本語）の授業をデザインし、学習者の専門的素養の向上を目指した。具体的には、ホテル業務、日本語能力を総合的に学習することを目的としている。本授業は、実地研修や実務練習などの多様な学習活動を取り入れることで、学習者が将来のインターンシップや就職に必要な実務能力や日本語能力の基礎を身につけられることを目標とした。本研究の対象は、応用日本語学科の 2、3 年生を中心とした 45 名であり、半年間の選択科目として実施された。授業を通して学習者のアンケート、中間、期末試験、期末の感想文などのデータを収集し主として量的分析を行った。その結果、本授業は、実務能力および日本語能力の双方で一定の向上が見られた。以上の結果は、CLIL を取り入れたホテル実務日本語の授業が、学習者に好意的に受け入れられたことが示唆された。

キーワード：ホテル日本語、JSP、CLIL、実務能力、日本語能力

CLIL を生かした JSP ホテル実務日本語の教育実践 —実務能力と日本語能力の向上を目指して—

栗原祐美

致理科技大学応用日本語学科助理教授

1. 研究の背景と目的

近年のコロナ終息後は世界的に観光需要が爆発的に増加しており、特に本来から往来が活発である台日のインバウンドとアウトバウンドは共により一層増加傾向にある¹。そのため、日本語に精通した専門人材の需要が高まっており、日本政府は優秀な人材を広く確保し、取り入れを積極的に行っている（羅濟立、2021）。

一方、大学教育においては、中学や高校時代にいわゆる「108 課綱」²というカリキュラムを経てきた学生たちが入学し、教員側も教え方に工夫をしなければならなくなっている。このカリキュラムは、台湾教育部が民国 108 年度から開始することを提唱したもので、その内容は、「108 課綱资讯网」によると現在起こっている変化や将来への課題に対応するための「素養」を養い、特に「知識、能力、態度」を身に着けるというものである。具体的に言えば、調理を行う際には、調理法や食材の知識、それを実際に調理する能力、そして食材に対する感謝などの態度、といったものである。このようなカリキュラムを経て入学してきた学生たちに合わせ、作者が勤務する大学でも、素養を意識したシラバスを編成している。具体的には一年次では日本語会話、日本語作文等の基礎科目を、二年次からはホテル実務日本語、航空日本語等の応用力をつける科目を、そして四年次にはインターンシップを必修科目にし、積極的に社会に関わる

¹ 台湾交通部観光署 <https://stat.taiwan.net.tw/> 2025 年 2 月 1 日検索。

² 台湾国教署「108 課綱资讯网」

<https://shs.k12ea.gov.tw/public/12basic/108course/index.html>。2025 年 2 月 1 日検索。

態度を育成している。

筆者が担当するホテル実務日本語では、学生たちは授業では比較的熱心に学習しているものの、実際にインターンシップに赴くと、職場に適応するのに時間がかかるなどの現象が見受けられる。例えば、飲み物をこぼしお客様を不快にさせてしまったり、クレームを受けてもうまく日本語で対応できないなど、こうした場面に直面すると挫折を感じたり、最終的にインターンシップを諦めてしまったりするケースもある。筆者もたびたび現場へ視察に赴いているが、上述のような現状の原因は、彼らの専門的実務能力と日本語能力両方の不足による可能性があるように感じられる。同様の現象が他大学や、その卒業生がホテルに就職した際にも起き、呉岳樺（2017）、羅濟立（2021）や羅曉勤（2021）からその事例が報告されている。

一方、専門日本語（Japanese for Specific Purpose, 以下 JSP とする）におけるホテル日本語の研究は、他の専門日本語の分野と比較するとまだ十分とは言えず、とりわけ、学習者の知識や日本語力の向上に関する具体的な教育実践研究は十分とはいえない。この課題を掘り下げるため、筆者は台湾の各大学が提供しているシラバス検索システムでホテル・観光日本語の授業を閲覧した。その結果、大半のシラバスは共通したところがあり、主にフロント（チェックイン・チェックアウト）の会話を先に学び、その後、レストラン部門やハウスキーピング部門の会話へと進むという構成が多かった。これらの授業は主に言語の習得に焦点を当てており、専門的内容、たとえばフロント業務や、トレイやお皿の運び方、客室清掃等の実務的な内容に関してはあまり記述がないようであった。

以上のような現状を踏まえ、CLIL（Content and Language Integrated Learning, 内容言語統合型学習）を組み合わせた授業を実施することで、学習者の専門素養の向上を図る。本研究では以下の3つの研究課題を設定する。

- 1) CLIL を取り入れた JSP ホテル日本語の授業は学習者の「実務能力」を向上させることができるのか。

- 2) CLIL を取り入れたホテル日本語の授業は学習者の「日本語能力」を向上させることができるのか。
- 3) 学習者は CLIL を取り入れた JSP の授業をどのように感じているのか。

2. 先行研究

本章では、研究目的に基づき、JSP とホテル日本語、CLIL の 2 項について先行研究の整理を行う。

2.1 JSP とホテル日本語

JSP は、特定の専門分野における日本語学習を目的とする言語教育であり、佐野ひろみ (2009) は、ESP (English for Specific Purpose) の研究を基礎に、JSP の定義を提示した。JSP の最大の特徴は、学習者が特定の分野に特化した学習ニーズを持っている点にある。例えば、ホテル、航空、介護などの業界では、短期間で業務に必要な日本語を習得することが求められる。よって JSP は学習ニーズに基づき、関連性の高い語彙や表現を選定し、適切な教授法を用いることで、学習者が迅速に必要な言語能力を獲得することを目指す。

次に、JSP の一分野であるホテル日本語であるが、過去 15 年ほどの間に台湾や日本でも文法語彙、カリキュラムデザインなどに関する研究が行われてきた。

表 1 台湾におけるホテル日本語の教育研究一覧

研究分野	研究者
文法語彙	黄女玲 (2008)、赤城永里子 (2009)
カリキュラムデザイン	菊本恵子 (2020)、林長河 (2014)

黄女玲 (2008) は、敬語や待遇表現を重視したホテル日本語教材を開発し、1 年間の教育実践を行った。その結果、専門教材が日本語理解の構築に有効であることが明らかとなった。赤城永里子 (2009)

は、ホテル日本語の教材 7 冊を分析した。その結果、「アーリーチェックイン」「オートロック」「いたしかねます」等、専門単語やホテル独特の言い回し、難解な敬語が多く含まれており、初中級には学習が困難であることを指摘している。

カリキュラムデザインについても様々な研究がなされている。菊本恵子（2020）は、ホテル日本語のカリキュラムは往々にして学習に十分な時間が与えられないケースが多いことを指摘した。また、林長河（2014）は観光業の職場適応力向上のために実地研修を導入しその効果を証明した。学習者は実際に現場で学ぶことで学習意欲と実務能力が向上することが明らかとなり、産学連携の強化が教育効果の向上につながることを指摘した。

2.2 CLIL

CLIL とは、Coyle, Hood & Marsh(2010)によって提唱された外国語教育の枠組みであり、科目内容と言語学習の両方を重視し、授業内で専門的な知識と語学の習得を並行して行うことを目的としている。渡部良典ら（2011）によれば、1995年に欧州評議会が CLIL という名称を採用し、言語教育推進のための教育モデルとして位置づけた。これにより、CLIL の教育アプローチはさらに注目を集めるようになった。台湾の日本語教育においても目下積極的に採用されており、近年では伊藤佳代（2023）や郭淑齡（2024）による研究が見られる。Coyle, Hood, & Marshによると、CLIL の主要な概念は 4 つの C(4Cs) から成り立っており、「内容 (Content)、言語 (Communication)、思考 (Cognition)、協学 (Community/Culture)」³で構成される。「内容」とは、専門科目の学習内容を指し、例えばフロントやレストラン業務内容が該当する。「言語」は、実際の場面で使用される言語能力や言語知識を指す。

³ 日本語訳は渡部良典ら(2011)を使用した。

表 2 4つのCの概要

4つのC	内容
内容 (Content)	専門科目の内容
言語 (Communication)	言語能力や言語知識 コミュニケーション
思考 (Cognition)	思考力や戦略、批判的思考力
協学 (Community/Culture)	教室内の仲間、学校外の人々との交流

「思考」には二つの種類があり、基礎的な記憶力や理解を養い（低次思考力、*Lower-Order Thinking Skills*）、さらに高度な思考力や批判的思考力（高次思考力、*Higher-Order Thinking Skills*）を育成することを指す。「協学」は、教室内の仲間、学外の人々や地域の人々といった異なるレベルのコミュニティと交流し、多様化を取り入れた学習を指す。CLILは専門的な内容と語学学習を並行して行うが、依然として語彙や文法といった言語知識の学習が必要である。そのため、Coyle, Hood, & Marsh は二つ目の「言語」について、3つの言語 (*Language Triptych*) という概念を提唱している。図1は、その概念を示すものである。「学習の言語(*Language of Learning*)」は、学習者が新しい知識を習得する際の文法や語彙を指す。「学習のための言語(*Language for Learning*)」とは、教師と学習者が授業のコミュニケーションにおいて使用する言語を指す。「学習を通しての言語(*Language through Learning*)」とは、学習者の既存の知識を基盤とし、新しい言語や知識を加えていくことで発展させるものである。上記の学習プロセスを繰り返すことにより、学習者は言語能力をさらに向上できるとされる。

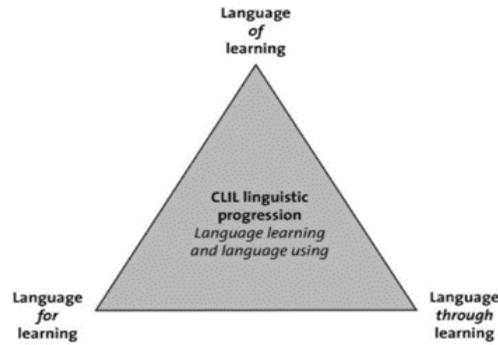


図 1 3 つの言語 (Coyle, Hood & Marsh, 2010: 36 より)

上記の 4 つの C や 3 つの言語を実践する過程で、学習者はさまざまな困難に直面する可能性がある。その際、教師は学習を促進するための支援をすることができる。Wood, Bruner, & Ross (1976)は、この支援を足場かけまたはスキヤフオールディング (Scaffolding) と呼び、Gibbons(2002)は学習者がスキヤフオールディングを通じて学習を続けたり問題解決能力を培うことができると述べている。

以上、JSP ホテル日本語と CLIL の二項目について先行研究を整理した。前者に関しては、実務能力と日本語能力の教育双方に課題を抱えており、実地研修などの産学協定の導入が求められることが示唆された。一方、後者は実務内容と言語学習を並行して進めることを主眼としている。したがって、この二つは高い親和性を有すると考えられる。ゆえに、本研究ではホテル実務日本語の授業に CLIL を応用し、その成果を検証することにする。

3. 授業のデザイン

3.1 ニーズ調査

先行研究の章で議論したように、JSP の授業デザインを行う際には、事前にニーズ調査を実施する必要がある。佐野ひろみ (2009)によると、教師が調査すべき主な対象として、学習者や専門家がある。学習者に関する調査項目には日本語レベル、学習リソース、学習目標などがあり、専門家に関しては身に付けておくべき専門的スキル、必要な言語知識などを聞き出しておく必要がある。表 3 はニ

ーズ調査の概要を表す。

表 3 ニーズ調査の概要

学習者	<p>日本語レベル：おおむね N1-5</p> <p>学習目標：ホテル日本語習得、4年次の国内外でのインターンシップへの参加、五つ星ホテルへの就職</p> <p>学習リソース：一般教室、「Zuvio」IRS システム</p>
専門家	<p>専門的スキル：フロント業務（フロントデスク、ベルサービス、オペレーター）、レストラン部門（中華料理、日本料理、ビュッフェ）、ハウスキーピング部門、ジム・プール部門の実務能力</p> <p>言語知識：上記の部門に関する会話能力や専門用語</p>

学習者には授業の第一週目に「Zuvio」IRS システムを使用して調査を行った。調査項目は、日本語レベル、学習目標、日本語学習歴等である。対象は応用日本語学科の選択科目である本授業を履修した45名で、主に2、3年生が中心であった。性別比は男性8名(17.78%)、女性37名(82.22%)であった。日本語能力試験(JLPT)レベルはN3(31.11%)が最多で、次いでN2(26.67%)、N1(6.67%)、その他(26.27%)は未受験者や未回答者である。学習者が高校で日本語を専攻した者と、大学入学後に始めた者が混在しており、レベルの差が大きかった。また学習目標については自由記述で回答してもらったところ、ホテル日本語の習得(44.44%)が一番多く、次いで4年次に国内や日本のホテルインターンシップへの参加(28.89%)、その他(単位の必要性、未回答等、22.22%)、卒業後五つ星ホテルへの就職を目指している者もいた(4.44%)。学習環境リソースとしては一般の言語教室しかなく、実務を練習できる実習室等の専門教室はほぼない。このため、学内でもできる実務活動を工夫したり、業界と連携して設備面の不足を補う必要があった。

専門家へは授業が始まる前の 2022 年 1 月に研究者がホテルへ赴き直接インタビューで調査を行い、インターンシップや就職に必要なスキルや言語能力について聞き取りをした。これらのスキルを実際に訓練したり、面接や採用をするのは人事部の役目であるので、人事部マネージャー1名と主任1名（いずれも男性）の計2名に対して計90分程度の聞き取りを行った。まず、専門的スキルとして、フロント、レストラン、ハウスキーピングの三大部門（Front Office, Food & Beverage, House Keeping、以下 FO、FB、HK とする）とジム・プール部門がある。たとえば FO ならチェックインなどの対応、FB ならトレーの持ち方、テーブルセッティングなどの実務能力が求められる。また、言語については、敬語を使った会話や、語彙なら FO の「チェックイン、満室」、FB なら「ビュッフェスタイル、ご注文」、HK の「タオル、シーツ」などがある。

3.2 授業の概要

本授業は前節で行ったニーズ調査と4つのCを元に枠組みを立てた。4つのCと授業の関連は以下のようなものである。

表4 授業と CLIL 4つのCsの関連表

4つのC	授業との関連
内容 (Content)	<p>A. FO 業務 (フロントデスク、ベルサービス、オペレーター、お辞儀等の正しい所作等)</p> <p>B. FB 業務 (中華料理、日本料理、ビュッフェ、料理を運ぶ、注文を取る、テーブルセッティング、トレーやトングの使い方等)</p> <p>C. HK 業務 (客室窓の清掃、アメニティの補充等)</p> <p>D. その他部門 (ジム・プール)</p>
言語 (Communication)	A. 学習の言語 (ホテルに関する語彙、文法、敬語等)

	<p>B. 学習のための言語（ペア間、教師や専門家に質問する言語）</p> <p>C. 学習を通しての言語（ホテル会話を作成し模擬接客をする）</p>
思考（Cognition）	<p>A. 低次思考力：語彙の暗記、業務内容の理解</p> <p>B. 高次思考力：ホテル会話の作成、事例分析（ケーススタディ）、動画撮影と編集</p>
協学 （Community/Culture）	<p>A. ペアワークで台詞を作成</p> <p>B. 専門家との交流</p>

学習目標は、1.各部門の業務を理解する（実務能力）、2. ホテルで使う日本語を学習し会話を作成して発表することができる（日本語能力）、の2つを設定した。成績の配点は中間、期末試験が各30%ずつ、出席20%、宿題と小テスト20%とした。授業計画は表4の枠組みをもとにして、三大部門FO、FB、HKの業務内容の理解、同時に各部門で使う日本語能力を伸ばせるように設定した。表5の授業計画表は、各週の学習トピック、内容、4つのCとの関連を記した。

表5 授業計画表

週	トピック	内容	4つのC
1	授業説明、ホテル概論	ホテル産業概論、事前アンケート	内容 A-D 思考 B
2-3	FO 部門	会話練習：フロントデスク（チェックイン・チェックアウト）	内容 B 言語 A、B 思考 A、B
		会話練習：ベルサービス、敬語 実務練習：お辞儀の仕方	
4-6	FB 部門	会話練習：中華料理	内容 B 言語 A、B 思考 A、B
		実務練習：テーブルセッティング 会話練習：日本料理	

		実務練習：日本酒テイスティング	
		会話練習：中華料理	
		事例分析：クレーム対応	
7	HK 部門	会話練習：客室清掃、アメニティの 補充 実務練習：ガラス清掃	内容 C 言語 A、B 思考 A、B
8	休日		
9	実地授業 1	M ホテル 課題：学習シート	内容 A-D、言語 B、思考 B、協学 B
10	中間口頭発表	部門を一つ選び、ペアで会話の台詞 を作成し発表	内容 A-D 言語 A、B
11	実地授業 2	C ホテル、FB 部門の実技 課題：学習シート	内容 A-D、言語 B、思考 B、協学 B
12	期末プロジェ クト	期末試験の説明	言語 B、C
13		台詞作成	思考 B
14		会話練習	協学 A
15		会話練習、暗記	
16		暗記・発音の小テスト	内容 A - D 言語 B、C 協学 A 思考 A
17		動画の撮影 編集アプリを使用して編集	協学 A 思考 B
18	期末作品発表 会	部門を一つ選び、ペアで会話の台詞 を作成し動画を撮影して発表 事後アンケート	思考 B 協学 A

学期の前半では、教科書を用いて FO、FB、HK の語彙、文法や会

話を主に練習した。また、3.1で分析したリソース不足を補うため、学内でもできる実技訓練、例えばお辞儀などホテルマンとしての正しい所作、テーブルセッティング、ガラスの掃除方法などの実務練習を取り入れ、実務内容の理解を深めるようにした。学内での実務はまず教師がスライドで解説した後手本を示し、次に学習者に実践させ、学習の様子を撮影し、また学習シートに学習した内容を記入してもらった（図2のa～b参照）。また事例分析も行い、例えばクレームの事例を紹介し、どのように対処するかペアで討論し、最後に発表させた。



図2 実務練習と実地研修の様子

前半の学習内容の習得度を評価するため、第 10 週に中間口頭会話試験を実施した。試験方式はペアで教科書の会話を参考に台詞をアレンジして作成し、暗記、発表させた。評価は参考資料 2 のルーブリックの第 1～3 項を使って実施した（資料 2 を参照）。中盤の第 9、11 週では、計 2 回の実地研修を実施した（図 2 の c 参照）。第 9 週の日系 M ホテルではまず、フロントやベルデスク、中華、日本、ビュッフェスタイルレストランなどの施設を見学し、最後に日本人コンシェルジュから、日本語でホテルの運営状況やホテルマンとしての心がまえなどの説明を受けた。第 11 週の C ホテルは日系ではないが、日本人宿泊客が多いホテルである。当日は館内の FO、FB、HK やジム・プールを見学した後バンケットルームを借りてレストラン部門主任の指導の下、トレーやトングの実務練習をさせてもらい、実務と教育のギャップを埋めることに努めた。学習者は初めての経験に最初は少々てこずっていた感じもあったが、比較的楽しそうに練習をこなしていた。これらの実地研修を通じて、学内だけでは得られなかったであろう実務的な訓練を補い、実際のホテル業務に即した学習の導入を試みた。後半は主に期末試験の製作に費やし、中間試験と同じようにペアで前半や中盤で学んだ内容や言語を使ってホテルでの会話を想定し台詞を作成し、暗記させた。その後、動画を撮影して YouTube にアップロードし、URL を Zuvio に提出する形式を採用した（図 2 の d）。この過程で学習者は専門的な内容や文法、語彙の面で困難を感じていたため、教師はスキャフォールディングを積極的に導入した。評価はルーブリックの第 1～5 項を使って実施した（資料 2 を参照）なお、期末も中間も同様の会話試験を行ったが、中間試験では動画撮影なし、期末試験では動画撮影のタスクありという形をとった。中間で動画を製作しなかったのは、昨年度の状況に基づき、第 10 週では学習者の実務能力および日本語能力がまだ不十分で困難だと判断したためである。

4. 研究方法

4.1 研究の手順

本研究は授業に合わせて 2022 年 2～6 月にかけて実施され、週 1 回 2 コマ (1 コマ 50 分)、計 17 週間の対面授業として開講された⁴。研究の手順は以下のようなものである。

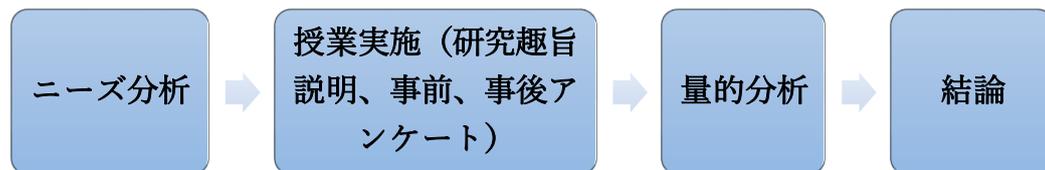


図 3 研究の手順

まず、授業開始前にニーズ分析を実施し、その後、第 1 週目の授業において学習者に研究の趣旨を説明した。その際、参加は任意であり、途中辞退も可能であることを十分に説明し、参加の意思確認を行った上で研究を開始した。次に授業を実施し、その後、主として量的分析を行い、補助的に質的分析も行った。最終的に結論を考察する。

4.2 方法

JSP と CLIL の研究方法には多く類似点があり、佐野ひろみ (2009) や奥野由紀子ら (2018) によると、主要な研究手法としてアンケート調査、口頭試験などが用いられる。本研究では、学習者のパフォーマンスを評価するために主に量的研究方法を採用したが、量的研究ではすくい切れない情報を得るため質的分析も補助的に行った。データの収集対象は以下の通りである。

量的分析:

事前・事後アンケートと期中・期末の口頭試験のルーブリックを使用する。アンケートは五段階評価のリッカート尺度 (Likert Scale) を採用し、授業の開始前と期末に調査した。先行研究の分析結果に

⁴ 本来一学期は全 18 週だが、一度祝日にあたったため実質 17 週となった。

に基づき、CLIL の 4 つの C に関する質問項目を 18 問設計した（資料 1 を参照）。データ収集には、Zuvio を使用し、t 検定で比較分析を行い、授業前後の変化を比較した。

質的分析：

期末に学習者による自由記述式の感想を記入してもらい、その内容を分析した。コーディングの方法は、伊藤佳代（2023）の枠組みを採用した。まず、学習者に S1～45 の番号をつけ、自由記述から CLIL の授業内容に関する箇所を抽出し、「内容」について言及した所に「NY」、「言語」に「GN」、「思考」に「SK」、「協学」に「KG」と記した。それらを表 4 で示した 4 つの C に分類し、研究者がそれぞれの記述数をカウントした。信頼性確保のため、集計した結果を翌日にもう一度確認をした。

5. 分析

5.1 実務能力

最初に、研究目的 1「CLIL を取り入れた専門日本語の授業は学習者の『実務能力』を向上させることができるのか」の課題に答えるため、CLIL の 4 つの C に関するアンケートを実施し、授業開始前と後のデータを比較した。

まず、本研究における実務能力は、CLIL の「内容」に近い概念と考えられる。よってまず内容に関して t 検定を行った結果、すべての項目で有意な差が認められた（表 6 参照）。平均値は 2.79→4.21 へと向上し、特に「ベルサービス」の理解度向上が最も顕著で、2.89→4.77 へと上昇した。学内ではベルサービスについての実務練習はお辞儀の所作以外ほぼ何も行われなかったにもかかわらず、実地研修で実際のベルデスクを見学したり、日本人コンシェルジュの方から説明を受けたことが影響したと推測される。同様に、学内では「オペレーター」「ジム・プール」などの実務演習はしなかったが、現地研修で見学したことにより理解を深めることができた可能性がある。また、「日本料理」の項目も 2.64→4.4 へと 1.76 の向上が見ら

れた。これは、日本酒や料理の知識など専門的な知識が不足していた学習者が、授業を通じて知識を習得した可能性が示唆される。

表 6 内容の理解度

	前	後	t 値
1.FO フロント	2.96	4.56	11.146***
2.FO ベルサービス	2.89	4.77	10.709***
3.FO オペレーター	2.47	4.07	8.984***
4.FB 中華料理	3.02	4.38	9.273***
5.FB 日本料理	2.64	4.4	12.009***
6.FB ビュッフェ	2.82	4.27	8.658***
7.HK	3.11	4.58	9.929***
8.ジム・プール	2.4	2.67	2.383**
平均値	2.79	4.21	---

また、実務練習活動として、正しいお辞儀の仕方、テーブルセッティング、日本酒のテイスティング、ガラスの清掃、事例分析、期末試験としての会話の動画制作⁵、Mホテル、Cホテルの現地研修の全8項目の学習活動を行った（表5参照）。これらの活動の学習効果について、カイ二乗検定（ $\chi^2=33.942, p<.01$ ）を行った結果、統計的に有意な差が認められた（表4参照）。45名のうち、34名がMホテルとCホテルへの現地学習が最も有益だったと答え、この結果は林長河（2014）の研究結果とも一致する。次に多かったのは、会話動画の制作だった（4名）。この結果から、動画を用いたタスク型学習が、実際の職場で必要とされるスキルの内容理解に寄与した可能性がある。動画の制作過程では、各部門の業務内容を把握していないと正しく動作できないため、撮影を通じて実務の復習としての効

⁵ 動画制作は実務を理解していないと動画中で正しい動作ができないため今回は実務練習の中に入れて、実務の範疇とするかには議論の余地が残る。

果を感じた学習者もいたのではないかと考えられる。一方、「日本酒のテイスティング（3名）」「お辞儀の仕方（2名）」「ガラスの清掃（2名）」については、学習者の評価が比較的低かった。これらの活動は、学内での学習活動なので、実地研修よりも相対的に学習の効果が薄かったようである。

表7 最も有益だったと思う実務練習活動

順序	活動	順序	活動
1	M ホテル実地研修 17名	5	お辞儀の仕方 2名
2	C ホテル実地研修 17名	6	ガラスの清掃 2名
3	会話の動画製作 4名	7	テーブルセッティング 0名
4	日本酒テイスティング 3名	7	事例分析 0名

以上の結果から、CLIL を取り入れた授業が実務能力の向上に一定の効果をもたらした可能性が示唆された。特に、ベルサービスや本格的な日本料理、また清酒など、学習者がこれまでの生活の中であまり触れてこなかった事項について、講義や実地研修を通じて理解が深まったことが確認された。また、実務練習活動の中では、実際のホテル研修が最も有益だと評価されたことから、学習者にとって最も重要な学習手段となった可能性がある。

また、「協学」についてであるが、ペアで話し合ったり、専門家に教えてもらったりする学習活動であるため、この節で討論することにする。表8からわかるように「ペア学習」と「実地研修」での専門家との交流は共に有意水準に達していた。特に、実地研修の伸び幅が大きく（3.13→4.36、1.23 上昇）、各部門の専門家からの実践的な指導が学習者の理解を深め、可能性がある。一方、ペア学習も 2.78→3.93 へと 1.15 の上昇を示しており、ペアでの議論を通じた学習が、相互理解を深めたり、おけるコミュニケーション能力の向上に寄与したと考えられる。

表 8 協学の理解度

	前	後	t 値
17.ペア学習	2.78	3.93	5.306***
18 実地研修	3.13	4.36	7.416***
平均値	2.96	4.15	---

5.2 日本語能力

次に、研究目的 2「CLIL を取り入れた専門日本語の授業は学習者の『日本語能力』を向上させることができるのか」の課題に答えるため、4つのCの「言語」の部分进行分析した。結果、FO、FB、HK、敬語の4項目で有意水準に達していた。伸び幅が一番大きかったのはHKで2.31→4.33と、2.02上昇した。これは単純に、HK部門は他に比べ、客とのやり取りが少なく、会話内容が比較的簡単であったことが影響していると考えられる。

一方、ジム・プールの項目については、2.36→2.64へとわずかな向上にとどまり、統計的に有意な差は認められなかった。これは授業時間の制約により、この部門の会話練習を省略せざるを得なかったことが要因であると推測される。

表 9 言語の理解度

	前	後	t 値
9.FO	2.42	4.33	14.274***
10.FB	2.33	4.25	14.877***
11.HK	2.31	4.33	13.129***
12.ジム・プール	2.36	2.64	1.616
13.敬語	2.91	4.44	9.535***
平均値	2.47	4.00	---

また、中間および期末試験において会話試験を実施し、得点を記録した。中間試験では動画撮影なし、期末試験では動画撮影ありと

いう違いがあるため、単純な比較は困難である。そのうえで、参考として得点の推移を分析した結果、中間試験と期末試験の平均点はそれぞれ 80.78、84.20 点であり、3.4 の上昇が見られた。ただ t 検定を実施した結果、有意水準には達していなかった。このことから、FO、FB、HK、敬語について、学習者自身は能力が向上したと認識しているものの、他者（教師）による評価では統計的に有意な向上は特に確認されなかった。

また、「思考」の面について、これは単語の暗記や会話の作成など、「言語」の項目をサポートするものなので、この節で分析を行っておく。結果、「事例分析」「会話作成」「動画製作」の3つの項目で有意水準に達した。特に伸び幅が大きかったのは、会話作成(2.71→4.31)と動画編集(2.47→3.89)で、それぞれ1.6と1.42の上昇を示した。これらの結果から、学習者は単に日本語の知識をインプットするだけでなく、知識を活用してアウトプットする能力を向上させた可能性がうかがえる。会話作成の向上幅が最も大きかったことは、学習者が自身の考えを整理し、適切な表現を選択しながら会話を組み立てる力を強化させたことを示唆する。一方で、動画製作においても有意な差が見られたことから、字幕を付けたりすることで言語力を高めることができたと学習者が感じたのではないかと考えられる。

表 10 思考の理解度

	前	後	t 値
14.事例分析	2.98	3.31	2.708**
15.会話作成	2.71	4.31	8.583***
16.動画製作	2.47	3.89	7.231***
平均	2.72	3.84	

以上の結果から、CLIL を取り入れたホテル日本語の授業は、学習者が自身の日本語能力の向上を実感していることが明らかになった。特に、FO、FB、HK、敬語の項目では統計的に有意な向上が見られ、各項目の日本語表現の習得が促進されたことが示唆される。しかし

ながら、他者評価による中間と期末試験の結果を比較すると、学習者自身の認識ほど顕著な向上は見られなかった。このことから、学習者の自己評価と客観的な評価との間に一定の乖離がある可能性も否定できない。

5.3 学習者の授業への評価

次に研究目的 3「学習者は CLIL を取り入れた専門科目の授業をどのように感じているのか」の課題に答えるために、質的分析を行った。学習者の自由記述の中から抽出されたものは合計 90 件あり、そのうち最も多かったのは「内容」に関する記述で 37 件、次に「言語」が 24 件、「協学」が 16 件、「思考」が 13 件であった。これにより、学習者が 4 つの C の中で特に意識したのは内容と言語であることがわかった（表 11 参照）。

この結果は、5.1 と 5.2 で行った実務能力と日本語能力の分析結果とも一致しており、学習者が授業を通じて実践的な知識や言語能力の向上を実感していたことが示唆される。

表 11 期末の感想の中の 4 つの C に関する記述出現回数

	内容	言語	思考	協学	合計
回数	37	24	13	16	90

また、学習者の自由記述を表 4 の 4 つの C との関連性の枠組みに対応させて分類し、以下に具体的な感想例を表 12 に紹介する。学習者は期末の感想で、特に「内容」と「言語」に対して高い評価を示したことがうかがえる。内容に関する記述が最も多く、授業を通じて実務内容を習得できたと感じたようだ。言語についても、敬語や専門用語の習得が促進され、特に S39、21 の回答からもわかるように会話練習や動画製作が学習者にとって効果的であったようだ。

表 12 期末感想の中の 4 つの C に関する感想例

内容	A	S41: 多くのことを学んだ。例えば、スタッフのお辞儀の仕方や服装、身だしなみなど。
	B,C, D	S13: 最初はホテルに関する知識がゼロだったが、授業を通して、レストランや客室清掃等の理解が深まった。
言語	A	S15: 敬語の使い方がもっと理解できるようになった。
	B	S39: 習った単語を使って会話の台本を書けた。
	C	S21: 中間と期末試験の口頭試験で、FB と FO の言葉についてより深く理解できるようになった。
思考	A	S39: 会話の台本を自分で作成し、単語も暗記したことで、自分で考える力をつけることができた。
	B	S35: 実地研修は楽しかったが、時間が足りなかった。 S18: 将来ホテルで実習してみたい。
協学	A	S18: 友達と会話練習をすることで、達成感を得られた。
	B	S32: 専門家の先生がとても優しくかった。いろいろな仕事内容を教えてくれた。

思考に関する記述では、会話の台本作成などの活動を通じて、自ら考える力が育成されたことが示唆され (S39)、さらにこの学習を将来のインターンシップへ生かそうという意欲も見られた (S18)。一方、実地研修の時間が短すぎたことに対する不満もあった (S35)。協学の面では、友人との会話練習や専門家との交流が、学習満足度を向上させた (S18) 可能性がある。これらの結果は、CLIL を活用した JSP の授業が学習者にとって有意義であった可能性を示唆している。

6. 結論

6.1 まとめ

本研究では、CLIL を取り入れた JSP のホテル実務日本語の授業を実施し、学習者の実務能力と日本語能力の向上、および授業に対する評価を分析した。まず研究目的 1 についてであるが、学習者は自身が実務能力の向上を遂げたと感じていた。事前と事後を比較したアンケートでは、すべての項目で有意な向上が認められ、特にベルサービスや日本料理の項目で大幅な伸びが見られた。さらに、8 項目の実務練習活動の中で、実地研修を選んだ学生が最も多く、学習者は実践的な学びを最も評価することがわかった。

また研究目的 2 の日本語能力であるが、アンケート調査からは学習者自身は向上したと感じていることが示唆された。特に FO、FB、HK、敬語の 4 項目で有意差が認められた。また、会話試験の平均点も中間より期末の方が向上した。ただし、統計的には有意水準に達しなかったため単に学生が自分の学習に満足していたにすぎなかった可能性がある。

加えて、「思考」や「協学」の面でも一定の成長が見られた。特に、会話作成や動画製作に関する理解度が向上し、学習者は教師のスキヤフオールディングを取り入れ学習を進めていた。また、ペアや専門家との交流を通じて、学習者の協学が深まり、この点も学習促進に寄与したのではないかと考えられる。

最後に研究目的 3 の学習者は CLIL を取り入れた JSP の授業をどう感じているのかについてだが、学習者の自由記述から、学習者は内容、および言語に関して最も評価していることが明らかになり、実務能力と言語能力の統合的な学習が受け入れられた可能性がある。特に、ホテル研修で実務を体験しながら学習できる点を学習者は好んだようだ。また、授業全体に対する肯定的な評価が多く、多くのことを学んだ、専門用語をより深く理解できるようになったなどの意見が見られた。これにより、CLIL を導入した授業が学習者にとって比較的好意的に受け入れられたと言えるであろう。

赤城永里子（2009）や林長河（2014）が指摘したように、これまでのホテル日本語の授業は、主に言語の側面に焦点を当てていて、実務的な内容の学習機会が不足していることが問題だった。しかし、CLIL を応用した JSP の授業のデザインはこのような課題を解消しうるものになるかもしれない。

6.2 今後の課題

本研究では、いくつかの課題も明らかになった。

まず、CLIL は本来 4 つの C が均等に重視されるべきであるが、本研究では内容と言語に偏りすぎ、思考と協学の要素を十分に取り入れられなかった。今後は、学生に台日のホテル文化の違いを議論させたり、問題解決型タスク等を取り入れることで、思考の高次思考力の育成を育成したり、グループで業務改善提案のようなプロジェクト型学習を取り入れることで協学をさらに深めることができよう。

次に、試験評価方法の改善である。本研究では、日本語能力の評価において、学習者自身の向上実感と、他者（教師）の評価に乖離が見られた。これは、同じ会話の試験でも、動画撮影タスクの有無が影響した可能性がある。今後は、試験方式を同一化し、また第一週目にも試験をしておくことで、三回の経過を観察することでより正確な比較ができるようにする必要がある。

また、5.1 の実務能力および 5.2 の日本語能力の分析において、多くの項目が有意水準に達した点が挙げられる。この結果は、学生が研究に参加していることを認識していたこと、また本研究のデータが Zuvio を通じて記名式で収集されたことに起因し、学習者が期待に応えようと意識的に高い評価をした可能性がある。したがって今後の研究では匿名アンケートを導入することで、学習者のバイアスを抑え、より客観的な評価を行うことが望ましい。

〈付記〉

本研究は 2022 年度教育部教学実践研究計画（PED1110275）の研

究成果の一部である。また、査読者の先生方から貴重なご意見を賜ったことを心より感謝申し上げたい。

参考文献

日本語：

赤城永里子(2009)「ゼロ初級からの職業目的のための日本語—ホテル日本語における問題点と今後の課題—」『日本語教育』50、pp.339-52

奥野由紀子・小林明子・佐藤礼子・元田静・渡部倫子(2018)『日本語教師のための CLIL 内容言語統合型学習入門』凡人社

菊本恵子(2020)「観光日本語シラバス作成のためのガイドライン提案—ホテルスタッフの例—」『日本語教育方法研究会誌』26(2)、pp.350-51

黄女玲(2008)「ホスピタリティ産業に対応する日本語教育の試み:待遇表現の理解と使用を中心に」(博士論文)大阪大学、大阪府

吳岳樺(2017)「訪日外国人観光客の動向に関する研究」『台湾応用日本語研究』19、pp.173-195

佐野ひろみ(2009)「目的別日本語教育再考」『専門日本語教育研究』11、pp.9-14

羅濟立(2021)「日本就職に対する元日本語学科生の初期適応について—ホテルスタッフを対象として—」『台湾日語教育学報』36、pp.1-27

羅曉勤(2021)「台湾人日本語既習者が語る日本職場のコンフリクト—ケースメソッド教授法の教材作成に向けて—」『台湾日語教育学報』36、pp.119-150

林長河(2014)「龍山寺を例にした自国文化を説明する日本語教育の模索—語学教育理論の応用と課題」『台湾日本語文学報』35、pp.351-374

渡部良典・池田真・和泉伸一(2011)『CLIL (内容言語統合型学習): 上智大学外国語教育の新たなる挑戦—第 1 巻実践と応用』上智大

学出版

中国語：

伊藤佳代(2023)「培養地方感為目標的 CLIL 通識課程之教學實踐:以「地方貢獻:以旅遊報導對日本宣傳旗山」為例」『台灣日語教育學報』40、pp.31-60

郭淑齡(2024)「以 CLIL 結合 PjBL 教學法提升日語系生進行 USR 前專業能力之教學實踐研究:以玄奘大學應日系為例」『台灣日語教育學報』43、pp.24-51

英語：

Coyle, D., Hood, P., & Marsh, D. (2010). *CLIL: Content and language integrated learning*. Cambridge University Press.

Gibbons, P. (2002). *Scaffolding language, scaffolding learning*. Heinemann.

Wood, D., Bruner, J. S., & Ross, G. (1976). The role of tutoring in problem solving. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 17(2), 89–100.

参考資料

資料 1 事前、事後アンケート

内容	t 値
1. フロントデスクの業務内容を理解している	11.146***
2. ベルサービスの業務内容を理解している	10.709***
3. オペレーターの業務内容を理解している	8.984***
4. 中華レストランの業務内容を理解している	9.273***
5. 日本食レストランの業務内容を理解している	12.009***
6. ビュッフェスタイルレストランについての業務内容を理解している	8.658***
7. ハウスキーピングの業務内容を理解している	9.929***
8. ジム・プールの業務内容を理解している	2.383**
言語	
9. フロントに関する日本語を聞き取ったり話したりできる	14.274***
10. レストランに関する日本語を聞いたり話したりできる	14.877***
11. ハウスキーピングに関する日本語を聞き取ったり話したりできる	13.129***
12. ジム・プールに関する日本語を聞き取ったり話したりできる	1.616
13. 敬語を適切に聞き取り、使用できる	9.535***
思考	
14. 事例を分析し、適切な対処方法を考案することができる	2.708**
15. 自分でホテル会話のシナリオを作成することができる	8.583***
16. 会話の動画を撮影し編集することができる	7.231***
協学	
17. ペアで協力し、会話の動画を撮影することができる	5.306***
18. 積極的に実地研修に参加し、学習を深めることができる	7.416***

資料2 試験のルーブリック

	とても良い	かなり良い	あまり良くない	良くない
1.正確さ	発音がはっきりしている、文法が正しい	発音がかなりはっきりしている、文法かなりが正しい	発音があまり良くない、文法があまり正しくない	発音が不明瞭、文法が正しくない
2.自然さ	とても流暢、語彙がとても豊富	かなり流暢、語彙がかなり豊富	あまり流暢でない、語彙が豊富でない	流暢でない、語彙が少ない
3.態度	声が大きい、ホテルマンとしての所作が正しい	声がやや大きい、ホテルマンとしての所作がかなり正しい	声があまり大きくない、ホテルマンとしての所作があまり正しくない	声が小さい、ホテルマンとしての所作が不自然
4.動画の内容	内容がとてもはっきりしている	内容がかなりはっきりしている	内容があまりはっきりしない	内容がはっきりしない
5.動画編集	とてもよく動画を編集している、字幕がとても正確	かなりよく動画を編集している、字幕がかなり正確	あまり動画を編集していない、字幕があまり正確でない	動画編集をしていない